

夢、目標大切に

これで生きる

2013年スタート

感謝の気持ち忘れず

長引く不況で、先が見えないこの時代。人々は新しい働き方をどう見つけ、どう生きていけばいいのか。テレビや著書で「仕事」について発言する小山薫堂さんと、女性起業家の支援を続ける菅原智美さんが語り合った。

(司会は共同通信編集委員・緒方伸一)

「仕事や働くことについて、日本の現状は？」

小山 比較によって仕事している人が多い。「自分の仕事はあの人の良い」とか「去年より売りの上げが増えた」とか、判断基準が常に外にある。原因は、常に成長を求める社会にある。マイナスを評価する姿勢があれば社会は変わると思う。

菅原 社員の不満は誰かと比べてどうか、というのが大半。給料を上げて誰かより低かったら不満だし、逆に安い給料でも皆同じだったら満足する。その原因として、夢や目標を持つていないことが挙げられる。

▽人との出会い

小山 日本人は「ぶれる」とはいいないと見ているが、今はぶれないと生き残れない。バスケットボールのピポットのよう、軸足は今の仕事に置いて動かさず、もう片方の足は動かしながら最良のパスを出す判断をすることが求められている。

菅原 女性の起業家を支援し

菅原智美 女性起業家支援会社社長 × 小山薫堂 放送作家

ている立場から言うと、民間調査会社のデータで女性経営者の割合が日本は6%。米国は25%、アジア各国も40%以上なので極端に少ない。

消費を決めるのは90%が女性だと言われているのに、女性が経営者として活躍していない。

子どもがいる女性が働きにくい状況も相変わらず。最近会った33歳の女性は、子どもを産む前は不動産の営業で数千万円も稼いでいたのに、復帰しようと30社受けて全て落ちてしまったという。

一日から一歩踏み出す方法はあるか。

菅原 誰と付き合つかで人生は変わる。新しい人と話す新しい情報も入ってくる。セミナーや勉強会に参加して多くの人と会えば、やりたいことが見つかると思う。

小山 行き詰まっている人は自分のことしか考えていない。打破する方法として、自分のことを差し置いて、他人のことを考えないで行動してみてもどうか。そこに新しい出会いが生まれるきっかけがある。

▽海外進出とシニア

「お二人の働くモットーは。」

小山 「俺たちは幸せだ」という父の言葉が僕のベースにある。父は「戦国時代なら、働くとは人を刀で斬ること。現代に生まれても、水をくむため毎朝2時間歩く国もあるんだぞ」とよく話していた。仕事で失敗しても戦国時代のように殺されないんだから、好きなことをやって人生を楽しもうという思いがある。

菅原 新しいことにチャレンジするのが好きで、起業した。人から感謝され、私と会って「人生が変わった」と言われるとやる気が湧いてくる。愛する人から感謝され、喜ばれることをビジネスにできれば最高だ。

「これからの働き方、進むべき方向は。」

菅原 日本企業は海外進出していると言われるが、大手企業は海外に進出していない。海外では日本人が経営しているだけでブランドになり得るので、中小企業のビジネスチャンスはいくらでもある。日本の優れた商品やサービスを持って行きたい。

小山 最近、シニア世代のことを僕は「グランド・ジュネレーション」と呼んでいる。この「グラジュネ」がどれだけ上手

女性の活躍サポート

菅原

▽ハードル不要

「就職難でスタートからつまずいてしまっ。」

菅原 待遇が良いとか正社員でなくて駄目とか、ハードルを設けているからではないか。働く人を求めている会社はたくさんあり、ハードルを設けなければ仕事は見つかるはず。何でもいいから仕事をして、まず百パーセント本気で働いてみると、いろんなチャンスが生まれてくると思う。

小山 今の学生は、確実にい

「ぶれる」姿勢

に無駄遣いをするのが、日本をもっと元気にするポイントだ。この世代がお金を楽しく使えば、日本の文化も向上すると思う。

例えば、神奈川県の大磯で60歳を過ぎた女性が自宅でカフェをやっている。大通りから入った住宅街なので、家族は「誰も来ないよ」と止めたが、売的上げゼロの日がないくらい繁盛している。

いゴールが見える。しない傾向がある。分らない物には。現代の日本には感謝する気持ち。こでもいから働になるのではない。今後、やりたい。小山 大磯の方。店をつなぐチェー



菅原 智美氏(すがはら ともみ) 70年新潟市生まれ。バブル期を生き残り、07年、女性起業家の支援と貸会議室を運営する「NATULUCK」設立。全国で約500人の女性経営者が登録する会員制の「女性経営者エンジェル倶楽部」の代表理事。

小山 薫堂 生まれ。放送作家。受賞した。形市の東北